

「動物たちの息吹」 チャリティーイベント

第24回 秘蔵の名品アートコレクション展

ホテルオークラ東京・アスコットホール 2018.07.30～08.23

チャリティーイベントは、企業・団体・個人が所有し、普段はなかなか鑑賞の機会がない貴重な絵画を紹介するもので、今回はホテルの所有地である「虎ノ門」の名に因み、「虎」をはじめとする種々の動物の姿に焦点を当てている。

展示作品は、力強い「虎」、魅力的な「猫」、愛らしい「犬」など、動物たちの息吹を感じさせる「約70点」で『珠玉の名作品』を愉しむことができる。

岸竹堂（きしちくどう）《猛虎図屏風》（部分）1890年 絹本着色 六曲一双



画伯は、日本の幕末から明治時代に活躍した日本画家であるが、幕末の混乱期には絵師としての生活が成り立たず困窮する時期があった。しかし、「京友禅の下絵」を描き流暢な意匠によって一世を風靡し、新たに大作にも取り組んでいる。

その後、サーカスで見た実物の「虎」に衝撃を受けて画風が一変して、一時「虎図」に執念を燃やして打ち込むあまりに、“虎が睨んでいる”と発狂して一時入院一幕もあったが、この仔虎を抱いた母虎図は「シカゴ万国博」で受賞している。

藤田嗣治（レオナルド・フジタ）《「猫十態」より》 1929年



「藤田嗣治」と言えば「猫」であり、作品にトレードマークのように登場するさまざまな「猫」を、その千変万化する姿態と生き生きとした表情と一緒に思い浮かべることができる画伯である。

このように「藤田」の多彩な絵画の舞台に、評判の高い人気俳優のごとく颯爽と登場して、様々な役を演じて見せるのが「猫たち」である。

私は「猫」を友達としているが、「猫姿」の様に「猫」がいなければ生きていけないと言う訳ではなく、また贅沢な「猫」でなければいけないというのではなく、「捨て猫」でも「泥棒猫」でも拾い上げて飼うのである。

私はよく「猫」を描くが、画室にいる時モデルがないと「猫」を描くのであり、サイン代わりに「猫」を描くこともある。 藤田嗣治『地を泳ぐ』1942年

『猫十態シリーズ』や『猫の本』に見られるように、背景も舞台設定もなくそれ自体中心のモチーフとして変化に富んだ多くの微笑ましい姿の「猫たち」は、変幻自在な姿を見せてわれわれを楽しませてくれる。

高階秀爾（大原美術館長）『猫の本』2006年